

# 特別支援学校での日記指導における一考察

— 「書くこと」をサポートするタブレット端末 —

北海道札幌養護学校 教諭 郡司 竜平

キーワード：特別支援学校、知的障害、自閉症、動的な視覚的情報、学習環境デザイン

## 1. 従来の課題

本校は、札幌市に位置する主に知的障害を有する児童生徒の特別支援学校である。全校の児童生徒数は、4学部309名（2015/12/22 現在）となっており、北海道内では大規模な学校である。

近年は、自閉症等の発達障害を併せ有する児童生徒が全体の6割を超えてきていることから、自閉症等への有効な支援とされる視覚的な支援を中心に指導・支援を行っている。校内では、「自閉症等への対応ガイドライン」を作成し、教職員が共通理解を図りながら児童生徒へ一貫した指導・支援ができるよう日々取り組んでいる。

校内における従来の日記指導は、学習活動や学校行事が終わると学級や学年全体で写真やスライドショーを見て、その活動を想起させるなど、主に教師と言語でのやりとりや教師が文例を提示し、それに基づいて日記を書き進めるといった形であった。その学習の多くは、教師主導型であり、児童が主体的に学習を進めるという姿には至っていなかった。

そこで、児童がより主体的に日記を書き進め、書くことに自信を持ち、他者に伝えられることを目指し、児童が日常的に慣れ親しんでいる iPad を学習のツールとして効果的に位置付ける方略を模索した。

## 2. 目的・目標

### (1) 主体的に日記を書く

児童の学習活動の目標を「自ら主体的に日記を書く」と設定した。上述したように、今までは教師からの指示を待って受動的に日記を書いていた児童が、自らタブレット端末を操作し、必要な情報を得ながら日記を書き進められる姿を具体的な行動目標として描いた。視覚的な情報処理の優位な児童が、「動的な視覚的情報」から体験活動を豊かにイメージし、自ら日記を書くことに取り組むことを目指した。

### (2) 動的な視覚的情報の有効性の検証

実践を進めるにあたり、教師側の目的の一つとして「動的な視覚的情報の有効性の検証」を設定した。ここでは、視覚的情報（主にイラスト、文字、静止画、動画）を「静的な視覚的情報」（主に教師が一斉に提示し、児童が受動的に情報を受け取る）と「動的な視覚的情報」（児童が自ら操作し、情報を得る）と便宜的に定義した。その動的な視覚的情報が、児童にどのように伝わり、学習行動がどのように変容していくのかを検証する題材として日記の指導を設定し、短期・長期スパンで検証することとした。

## 3. 実践内容

### 3.1 ICT 活用の工夫

#### 3.1(1) 学習環境デザイン

実践に用いた機器は、一斉提示用のデジタルテレビ、教師用 iPad、児童用 iPad×4、データ作成管理用の Macbook である。

従来の一斉提示の静的な視覚的情報に加えて、動的な視覚的情報に一人一人がアクセスできる環境を設定

した。具体的には、学習のねらいや実態に応じて小グループを編成し、一人一台 iPad 端末の環境を構成した。端末ごとに iBooks 上に過去のデータも含めて配置し、児童が自由にアクセスできるよう工夫をした。また、児童が学習へ集中できるよう端末のアクセシビリティの学習サポート機能（アクセスガイド）を活用した。



図1 iBooks 上の構成  
自由にデータにアクセスできるように

### 3.1(2) 提示データの工夫

提示用のデータは、児童の学習状況によって改善を繰り返した。大きく3期に分け、改善の概要を示す。

- ①導入期：iPod touch 上にアナログの日記シート連動した1対1対応のシート（Apple:Keynote）を提示し、文字、文章を視写して日記に取り組む。
- ②展開期：体験活動の写真や動画（iBooks）を提示し、一人一人が体験活動を想起し、個に合わせた文例を提示し、それらを参考にしながら日記に取り組む。
- ③発展期：動的な視覚的情報（iBooks）を自ら操作し、情報をもとに一人一人が主体的に日記を書き進める。



図2 iBooks 上の画面  
ストーリー性に配慮して

特に展開期から発展期にかけては、個の認知特性により応じるため、静止画のサイズや動画の長さを調整した。静止画や動画の組み合わせによって、容易に活動が想起できるようストーリー性にも配慮した。また、画像で

イメージしてから文章を起こせるように、ポップアップ機能を活用して文字や文例を表示できるようデータを改善した。児童によっては、クイズ形式にするなど、学習への意欲が持続できるように実践した。



図3 iBooks上の画面  
ポップアップ機能を活用

### 3. 2 一般化するための取り組み

本実践を進めることと、その実践内容や実践方法を広く周りへ伝えるなど、実践を広げていく取り組みを同時並行で行った。

写真2 展開期（自ら書き進める）

まず、有料アプリを使用するとデータを活用できる端末が限定的になってしまう恐れがあったため、できるかぎり多くの端末でアクセスできるようデフォルトのアプリ（iBooks）を使用することとした。そうすることで、同学年内における他の学習場面での活用や、他学年での学習場面での活用が見込まれた。加えて、基本データのフォーマットを簡素化することで後のデータ編集をできるかぎり簡単にできるように配慮してデータ作成をした。

さらに校内外へ活動を広く伝えるため研修講座などを積極的に活用して、具体的な内容やその取り組み方法を伝える機会を設定することに努めた。学校HPへ取り組みの様子を掲載していただいたり、教育雑誌の執筆の機会にも本実践を書かせていただいたりした。

また、取り組みに興味を持ったり実践に取り組んだりする教員とは、日常的に実地研修を実施したり、外部の研修機会を活用して新たな機能等についての検証も行った。

## 4. 成果

この取り組みは、日常の朝の学習や、個別の課題学習における書字学習などと連携しながら実施した。日記の指導自体は、主に校外学習や運動会、遠足、学習発表会などの大きな学校行事のたびに取り組んだ。導入期は、アナログの日記シートにそった形でのデジタルな視覚的な情報提示にとどまった。展開期でのブラッシュアップ



写真1 導入期  
（視写が中心）

を経て、発展期の現在は、文字や文例を教師が提示するまで待っていた児童が自ら端末を操作し、主体的に視写したり、文章を考えて書いたりできるまでに成長した。学習環境デザインを再検討し、より個に

応じた形で、一人一台の端末にオリジナルの iBooks データを作成し、活用したことが効果を上げた。一人一人が本を夢中で読むように、iBooks データを読み進め、学習活動を振り返るようになった。また、児童が



くり返し学習活動に取り組む中で、端末を自由に扱い、自らの学習ペースで

主体的に学習を進める様子が見て取れた。

iBooks のデータ作成は、個の認知特性に合わせた。写真や動画の配置により容易に学習活動をイメージ化できるようになり、ポップアップ形式による文字や文例の提示から自分なりの文章記述ができるようになってきた。そして、複数の活動場面から自ら選び、書き進めることで書くことに対する達成感を得られるように



写真3 発展期（話題を自己選択）

なった。今では、自分で書

いた日記に自信をもって友達や教師に伝えられるまでになった。

さらには、この学習から日常的な書字学習への意欲も高まり、その相乗効果で書字のスピードが速くなったり、文例から自分なりの感想や思いを加えて文章構成できるようになったりしてきている。二語文や三語文での基本的な文構成の学習からスタートした児童が、今では一つの学習や行事を振り返られるまで文章を紡いで書くようになるなど、ICT 機器が日常の学習活動を確かに支えるツールとして位置付いたと考えている。

## 5. 今後に向けて

この取り組みによって、動的な視覚的情報を自分で

扱える学習環境であれば、くり返し学習していく中で、児童が主体的に学習活動に向かい、学習が充実し、達成感をもって学習できることが確認されたと考えている。そして、動的な視覚的情報は静的な情報よりも児童にとって意欲関心が高まり、より主体的な学習に結びついてつくことが観察から見て取れた。

今後の課題は、いまあるデータフォーマットをより簡素化し、校内外で広く活用できるようにすること、データだけでなく、実践自体の価値づけを適切に行い、実践内容を広く伝えていくこと、そしてなにより児童生徒の学習活動がより充実するよう学習環境デザインをより深化充実させていくことだと考えている。